



六
花

1

2021

りっかはいくかい

初 春

山 田 六 甲

は 初東風やかごめは要らぬ尾長鶏
つ つややかに初髪結へる女将かな
ゆ 夕暮の戸を叩きくる年賀客
め 目の前を通り過ぎたる恵比寿笹
の 野良猫に初夢ありや寝そべりて
せ 千両の実をこぼしたる床美し
め 目薬を初日に向ひ差しにけり
て 手を取つてもらふ日岡の初詣
は 羽子板に打ち傷それもおめでたし
す 双六の骰は茶碗を鳴らしけり
ゑ 恵比寿から鯛をもらひし夢始
の 軒先の注連縄雀かしましき
よ 夜明から七種打ちの調子よし

か 数の子を肴にしたる福錦
り リハビリのつもりで池へ初すずめ
け 蹴鞠始年季入たる袴かな
り 龍吐水若水として手に受る
く 鍬始畦に立たる幣の松
ぼ ぼくたちは戦後の育ち初詣
た 竹串に焼上りたる睨鯛
ま 丸餅がよかり浪花の雑煮には
ん 運のよきものを引き当て初みくじ
た たため息の花散る里や投扇興
ろ 蠟引きの床の間に春駒の軸
う 歌かるた老らくの声裏返る

正座してももで感じる夜寒かな 出口 誠

南東に明るき星の夜寒かな
 夜寒かな「聞こえてゐない」と聞き返す
 階段に足音ひびく夜寒かな
 風吹きて骨身にしみる夜寒かな
 息子らの帰りを待ちて夜寒かな
 夜寒かなこみをさはりて手を洗ひ
 夜寒かなノックしないで開けるドア
 四秒でドアを閉めたる夜寒かな
 正座してももで感じる夜寒かな
 夜寒かな静かにペンを置いてゐる

正座してももで寒さを感じるというのが佳い。体全体で感じているのを一部に絞って採り上げると効果的に季節を感じるという手法は啄木を馱に見送りに来た妻の眉についた雪の歌と以前にも言ったことがある。私はこの句の心を探りたいので何度も正座してみた。すると皮膚の寒さではなく夜の心の寒さの方が強いと気付いた。寒さだけでなく理由あるゆえの正座かしらん。

せいでしててももかんじるよむかな でんきまこと

笹村政子

白萩に日の移りけり西の門
 木洩日を通れる落葉ありにけり
 中天のむらさきめける月の暈
 アトリエに松茸の香の残りをり
 大阿蘇の花野に母を降しけり
 カウベルの音のほかなき花野かな
 竹蓋をめぐつて見たる月の井戸
 どんぐりの処を得たる向きむきに
 片寄せて風に掃かるる落葉かな
 母の灯のともりてゐたる十三夜

月の井戸

菩提子

秋の声なり録音の黄鐘調
秋声のひとつに庫裡の作務衣僧
色鳥にふくらみ松の亭々たり
ぬばたまや爽けき黒に弾けそめ
竹春の葉騒の楽を鶴林寺
菩提子や青空漕いで漂うて
衣かつぎ真中に入れる包丁目

升田ヤス子

志方章子

とんばうになりたきけふの気分かな
頑な心ほどくる鱗雲
無月かなテールランプの過ぎゆける
白銀に光る茸の神々し
行きずりの萩の主を見てみだし
鱗雲見上げ一日終はりけり
人老いて地球も老いて月今宵
秋草を踏みて行きたる実家かな
コスモスを挿して優しき心持
椎茸の櫛より摘みし二三片

善野 行

薙ぎ払ふ真葛が原に光る霧
福崎町・七種滝
絶巔の爽籟に出でしぶく水
かなかなや沼に沈んでゆく孤影
初鳴やはやつがひにて道の端
白鷺の立ち水際の澄みにけり
稲刈りし名残にほふや印南野
鶴林寺吟行 三句
片雲に絡まぬ秋の大庇
秋天に松籟を聞く妻戸かな
松風の澄みて一石一字塔
しつとりと日をはらみぬる芒かな

鶴林寺

播磨路の古刹に秋を惜しみけり
本堂の仏にまみゆ秋の蝶
コロナ禍の古びし絵馬や秋の風
稔り田の日に焦がれたる匂ひかな
しづもれる七堂伽藍秋の風
たえ間なく紅葉且つ散る鶴林寺
わたり鳥見上ぐる我をとどまらず
さざ波の石橋くぐる新松子
大杉の塔を越えけり鴟日和
喰はれたる木槿を白とおもひけり

藤生不二男

大内幸子

塗装して床甦る冬隣
集落の没道埋めて泡立草
天高く土手に二つの休み石
木犀や身内ばかりの忌日かな
忌日の子新米積んで帰りけり
投函や草じらみ付け戻りけり
投函や摘んで戻りし帰り花
施設訪ふ変はりはなく秋桜
辺りみな刈田となりて朝日満つ
戻り来て一瞬暗き石路日和

住田千代子

無花果や籠いつばいの思ひ出よ
石橋に風が来てゐて蒲の絮
榎櫃の実手にしつとりと馴染みくる
思ひ出の無花果のあの甘きこと
生活のにほひを寺の秋簾
色変へぬ松や尾上の鶴林寺
爽籟にふたたび広ぐ寺の絵図
あかあかと群るるが淋し彼岸花
菩提子の光りの中を飛びにけり
松籟とあひ重なりぬ鴉の声

出口 誠

南東に明るき星の夜寒かな
夜寒かな「聞こえてゐない」と聞き返す
階段に足音ひびく夜寒かな
風吹きて骨身にしみる夜寒かな
息子らの帰りを待ちて夜寒かな
夜寒かなごみをさはりて手を洗ひ
夜寒かなノックしないで開けるドア
四秒でドアを閉めたる夜寒かな
正座してももで感じる夜寒かな
夜寒かな静かにペンを置いてゐる

永田万年青

穴惑ひ素早く草に消えにけり
川に脚浸す男女や秋うらら
友が寄り蜜柑の皮の数多なる
夜長かな写真の整理ままならず
秋思かな寿命と思ふ齡越えて
閉ぢ籠りうぢうぢしたる秋日和
樹の幹に刺さりてをりし猿茸
土瓶蒸し香りと共にすすりけり
朝寒や右脳回転してゐたる
晩秋の鉄棒雨に濡れてゐる

田尻りさ

藪影に隠れし月の光かな
それぞれの樹形際立つ秋の山
本堂の秋日澄みをり香の満る
回廊のきしみて秋の風通る
竜吐水突然出づる紅葉寺
秋の蚊を打てば黒い血滲みけり
神像を従へおはす秋の声
回廊に秋日の照りて温もれり
喧騒の南京街の紅葉かな
マスクの中であつかんべえや疫の街

谷口一献

何もせぬ母の想ひ出煤払
ビール壺ぽおと鳴らして年忘
いつまでも頭を上げぬ浮寝鳥
秋色の仁王の貌に緩み無し
木漏れ日の秋の香りの茸山
うな垂れて松茸狩の終りけり
猿茸淡い煙を吐きにけり
黒豆の殻剥きながら酌み交はす
風呂桶の響きあと引く秋深し
野良猫の転がつてゐる小春かな

平居澗子

秋色に満たされてゐる鶴林寺
秋風に吹かれてゐたる女人かな
歌碑の文字指もてなぞり初紅葉
水引草の奥へ奥へと咲きにけり
萩の花弁天池に溺れぬし
切株の窪みに光る秋の水
てのひらに菩提子のせてくれる人
野分雲狼滅びたる山に
常世へと続く花野の落し穴
真向ひの子の住む棟に月上る

廣畑育子

天高し鉄棒遊びの子を見上ぐ
早口に語り合ひゐる稲雀
草紅葉少し水漬ける畑の中
目を移す川面おはぐろとんぼかな
皺々の棗しがめばまだ甘し
採石の山を背に咲く曼珠沙華
曼珠沙華溢るる中の六地藏
袴腰鐘楼に舞ふ秋の蝶
筋塀や蛇穴に入るところなり
たわわなる榎櫃の空を鷺行ける

延川五十昭

みちのくや小さき駅舎のこぼれ萩
秋の蚊を払へど出羽の関所跡
秋うらら堆満珠寺の猫会議
関跡の盗みたくなるあけびの実
曼珠沙華行く人のなき関所跡
鳥海山谷へひろがる草紅葉
吹き上る風に煽らる秋の蝶
秋雲や船頭歌ふ最上節
鶴鴿の先達となる羽黒山
山寺や暮れゆく溪の法師蟬

及川笙子

秋暑く笹川流れ波しづか
月山のやまがたに霧流れけり
白萩のこぼれる小路中尊寺
鳥海山の紅葉の錦昼の夢
たま風や夜泣き椿の泣きどころ
猫五匹冬青空に集ひけり
結界の松茸山を覗きけり
茸山熊に注意の立看板
天高し紅葉マークの車列かな
百舌鳥にえの衣掛枝に吹かれをり

浜田久美子

名月を映す盃なかりけり
月見酒紫式部偲びつつ
月見上ぐ紫式部思ひつつ
名月や月見団子をゆがきをり
踏み入れば松の香りの秋気かな
鶉の鳴きつつ飛べる牧水忌
秋雨の夜は山頭火繻いて
秋晴れや豆腐売り来る堺より
落葉掃く帰る娘と孫を待ち
上弦の月や希林の映画観て

江見 巖

爽やかな魚鼓のひびきや禅の寺
オリーブの実地中海より小豆島
櫛紅葉携へ帰る猿の群れ
露草や匍匐前進後退す
かずら橋下より風の夕楓
満月を担ぎ出したる棺かな
畑より部屋に入るやつづれさせ
通り過ぐ色なき風の躡口
病窓に入り込んだる金木犀
念ずれば心通ずる鳳仙花